



最後の年にかける主将の寺下洸平



昨秋の入れ替え戦で勝利した吉村寛子(国際4・昭和学園)・齊藤香純(政経2・昭和学園)ペア



加納明彦部長



櫻井智明監督



土田章代女子主将と寺下洸平男子主将



第40回 ソフトテニス部

紫紺の勇者たち *Heroes of the Meiji*

文・撮影/菊地武顕
写真提供/明大スポーツ新聞

—明大体育会の系譜—

期待の新生入生が部を活性化 テニス界の七不思議(!?)打破へ

明治大学はソフトテニス(1992年に軟式庭球から競技名変更)の古豪であり強豪。日本のソフトテニスを引っ張ってきた歴史を誇る。

明治のテニスを支えているのは、「前へ」の精神。

「攻撃的なテニスを信条としています。攻撃が、リラックスを生みます。絶対に受身になるな」と教えています」(櫻井智明監督)

創部は1906年(明治39年)。明治大学初代校長・岸本辰雄自らが会長となって設立された校友会の「陸上運動部」のひとつとして、創設されたのだ。当初は軟式、硬式がひとつの部として活動していたが、1912年(大正元年)にそれぞれ独立した部に移行した。

歴史が古いだけではない。31年(昭和6年)に行なわれた第一回大学高専大会で、栄えある優勝を遂げている。これまで櫻井(76年卒。現監督)、斉藤広宣(90年卒)、北本英幸(91年卒。現コーチ)、菅野創世(06年卒)と4人もの世界選手権個人戦優勝者を輩出している。女子部の創設も早い。女子部員が

活動を始めた正確な時期は分からないが、48年(昭和23年)に大会に出場した記録が残っている。OGには、在学中に硬式テニスに転向し、後にプロとして四大大会に出場した畠中君代(67年卒)がいる。畠中は転向前の2年間で、インカレの個人戦で2度、団体戦でも1度優勝を経験している。

インカレ団体で勝てない

栄光の歴史を誇るのだが……。OB会長の重田衛(69年卒)、監督の櫻井、コーチの近秀一(73年卒)の3人が苦笑する。

「男子はどういうわけか、一度もインカレで団体優勝をしてないんですよ。例年、関東の方が関西よりもレベルが高く、東日本の決勝で3-0で圧勝し今度こそ期待した年があったんですが、同志社に敗れてしまったら……。全日本学生王座決定戦という別の大会の団体戦で優勝した年も、インカレでは勝てなかった。これまでの最高位は準優勝。」

「でも、幻の優勝はあるんですけど、3人は意気込んで話し出した。日本大学と争った84年の決勝戦。明治が2-1とリードし、次の対戦でもマッチポイントをつ握った。あと1ポイントというゲームで、相手がネットタッチをした(ように見えた。音もしたという)。

悲願の初優勝で歓喜に沸いたのも束の間。審判はネットタッチを取らず日大側のポイントに。その後、流れが変わって優勝を逸したのだ。

壁にぶち当たった近年

さて近年の男子は、関東の3~4番手という位置に落ち着いている。「ここ10年くらいは、早稲田が圧倒的に強いんです。高校時代の一番手は早稲田に入る。彼らは中学・高校を通じて、明治に入ってきた選手と対戦し勝ち続けています。そのため自信を持って試合に臨む。たとえ明治がリードしても決して慌てず、最後はきつちりと勝負を決めてくるんです」(櫻井監督)

女子は、部員数の関係で何度か活動を停止した時期もある。現在のチームは08年に活動を再開したもので、関東リーグ10部からのスタートだった。その後は年に2回のリーグ

戦で優勝し、入れ替え戦に勝利。順調に昇格を続けて、現在は2部。「とはいえ、1部昇格ができません。去年も春と秋に優勝したんですが、どっちも入れ替え戦で負けてしまいました」(同前)

期待の1年が部を活性化

いわば、男女共に壁に当たっているのだ。しかし、この状態を打破できる起爆剤が今春、入学した。男子はインターハイ個人戦で優勝した丸岡俊介(政経1・尽誠学園)女子は同準優勝の高橋勅有(商1・国本女子)である。

おのずと、上級生たちのモチベーションも高まってきている。「もちろん刺激になります。これまで中途半端な順位ばかりでしたが、最後の年は満足できる成績を残しています。1年生に頼らず、自分たちが引っ張っていきます」(男子主将・寺下洸平。農4・小松市立)

「二人一人のレベルが上がれば、一部の差はないと思います。昇格の手ごたえはあります」(女子主将・土田章代。商4・昭和学院)

「前へ」の攻撃的なテニスで、是非とも悲願を達成して欲しい。(文中敬称略)